

現代モンゴル民俗における火の機能及び文化象徴

ー 日本との共通性から ー

ナランゲレル
娜仁格日勒*

要旨：

火の使用は人類にとって原初的、本質的な意味を持つ。火は人類文化の起源と密接に係わっている。世界の民族文化のなかで火は非常に重要な位置を占め、それぞれの民族にはそれぞれの火に対する信仰が存在する。その信仰は様々であるが、相似または同じ事象も少なくない。本稿はモンゴルと日本の通過儀礼および他の習慣に見られるいくつかの火の信仰について、両民族の文化に共通する火の文化象徴的な意義を述べ、特に現代モンゴル族文化の中に見られる農耕文化と日本との共通要素を見出してみたい。

キーワード：火、文化象徴、モンゴルと日本、通過儀礼

はじめに

火は人類文化の発生には非常に重要な役割を果たしている。火の製作と利用こそは、人間を動物から区別する上で、議論の余地のない、最も明瞭な印であり、人を人へと作り上げたと言われる要素である。火の持っている種々の宗教性は、それが人類文化の発展の最古にして最大のエポックをなすものである所から導かれたことである

うが、世界の文化史の中に大きな地位を占めている。モンゴルと日本の文化習俗のなかには火にかかわる信仰と儀礼が数多く存在している。本稿ではその若干の内容を考察し、この二つの文化に共通する火の文化象徴的な意味を論じたい。

一、家庭生活における火、およびその文化象徴的な意義

家庭生活としては雨露をしのぎ、身を寄せる建物が欠かせないが、これだけでは住居といえない。いま一つ欠かせないものは火である。つまり、最も簡単な家族用住居は、外枠たる建物と、その内部で燃える火から成り立つのである。モンゴル人にとっては、火は家族生活における不可欠な要素であるのみならず、さらに住居内における各種の秩序を決める要でもある。

モンゴル人はゲル¹（写真1、2）を造るとき、まず炉の位置を決めてから、炉を中心に住居内の各品物の場所を決める。また、住居のなかでは、炉を中心に家族メンバーが各自の座る場所を持ち、それによって家庭におけるそれぞれの地位も分かる。炉が住居の中心に据えられ、中から戸口に向かってその右側は男性の空間であり、放牧や狩猟で使われる道具もここに置くかこの右側の壁に掛ける（写真3、4、5）。左は女性および子供の空間であり、女性の衣服や

*内蒙古大学外国語学院教授、日本学術振興会
外国人招聘研究者、国立民族学博物館外来研究員

食器など生活用品の置かれる場所であり、子供の出産、食事の用意などがここで行なわれる。また冬には、生まれたばかりの子牛や子羊、子馬などの世話もここで行われる（写真6）。客も男女によって右と左に分かれて席に就く²（写真7）。

仏像はモンゴルゲル内の西北隅に安置される。大事な客ほど、その座席は仏像に近い。仏像の置かれていない住居で寝るときには、頭を炉に足を壁に向け、炉を中心に円をかくような形になる³。これは炉（火）が家族を結ぶ絆であることを最も明確に表している。家族生活は炉を中枢として編成されている。炉（火）は食品の調理や厳寒の防御に用いる「物質」のみならず、家族を連結するものであり、家庭の象徴である。したがって、家庭用の火を維持しつつ、常用の火を絶やさない努力の背後には、技術的事情以上の象徴的な意味がある。

炉（火）が家庭生活の秩序を決める機能は、日本の囲炉裏にも明確に見受けられる。幕末から明治初期あたりまでの日本の農村では、その住居は土座（土間）形式のものが多かった。土座形式の住居では必ず炉が生活の中心に置かれ、家族の各々の座る位置が決まっていた。この炉の周りの座には座るべき家族の序列に応じて名称がつけられていた。家長の座はヨコザ（横座）、主婦の座はカカザ（嫡座）、客や長男の座はキャクザ座（客座）、他はシモザ（下座）という（写真8）。

日常の食事をとり団欒をする炉の周囲は、このように座るべき人が特定され、名称が与えられてしまうと、一人ひとりの地位や役割が明確になり、それに応じた言動が要

請されてくる。そのため、炉は一家の秩序を維持する根源的な機能を持つことになる。とくに嫁・姑同居の家族の場合、姑が主婦の座にいる限りは、嫁は下座に坐って、家事や家風などについて教えをうける（写真9）。かくして、炉は序列を確認する空間でもあった。また、日本の住居内においても、男女、左右及び聖俗の区分があり、前述のモンゴルのそれと相似している。つまり、ヨコザとキャクザは表側の座敷と出居に対応して公的性格を持った家長ないし男の空間であり、カカザとシモザが裏側の寝間と台所に対応して私的性格をもった主婦ないし女の空間である。表の空間にはりっぱな神棚や仏壇が設けられ、公的に認められた清浄高貴な神を勧請してまつり、家長の宗教的権威づけを補強し、私的な裏の空間に属する女性を拒否することによって、家の繁栄永続が保証されると考えたのである⁴。

炉を中心とした秩序は、男と女、左と右ならびに聖と俗の対立と結合の関係を表現している。モンゴルゲル内の炉の右側は男性の空間として宗教上の優位を示し、女性が拒否される聖的な領域である。左側は女性に属する俗の空間である。炉はこうにして家族共同体の生活中軸を成すのである。各家の炉の火が家族を統合し、他の家族と区別させ、分離させる。さらに、家族より広い社会的な場についても同じことが言える。狩りに出かけるモンゴル人は、行動と運命を共にする一つの臨時共同体を形成するが、これは *γal neilekü*⁵ といい、火の結合との意味である。これは火を絆として成り立った臨時の生活共同体である。平時、異なる火（炉）を有し、相違する各々の共

同体——家庭に属する人々は今、これもまた火によって一つの共同体を構成するのである。火は社会的結合と排他性とを表す恰好の象徴となっている。

このようにして、炉（火）は人々の生活の場の物的構成つまり住居の中心に据えられ、家族生活の安寧の存続を保証し、社会的には、生活を共にする人々つまり家族の結合をもたらし、さらに性的分業を決める。そして、異なる次元での人々の重層的な共同体を形成させる⁶。

二、結婚式における火

炉は家族の象徴であり、昔、モンゴルでも日本でも家庭用の火を絶やさないようにと努力していた。さらに、内モンゴルでは、農耕の進行程度にかかわらず、炉に火を点じるかまたは竈の火を拝む儀式から始められるという結婚式の習慣は今も守られている。日本の結婚式にも門火の習慣があり、火の要素が伴っている。結婚式における火は次のような象徴的な意味を担っていると考えられる。

まず、火は新生活の開始を意味する。モンゴルの結婚式では、花嫁が新郎の家の炉または竈に新しい火を起こし、この火を拝む。結婚による新たな生活の開始は新火によって画される。日本では、花嫁が生家を出るとき、門火を焚く（写真10）。これらの儀式には、新婦が生家の火と別れ、新しい火を伴うことになるが、過去とこれからの家庭生活に区切りをつける意味が含まれる。火は生活の連続と中断、開始と終結を象徴している。

つぎに、火は家族の一メンバーになるこ

とを意味する。火は家族を統合するシンボルであり、絆であるため、火の神は家族の非常に重要な守護神である。モンゴルでは上述のように、花嫁がまず火（竈または炉）の神に拝む。日本にも「入家儀礼」があり、花嫁が婚家に入るとき、屋敷の入口で雄蝶雌蝶と呼ばれる男の子と女の子のかざす松明をまたぐ儀礼がある⁷。この「火を跨ぐ」儀礼および生家婚家の提灯交換の「火による嫁迎え」の儀礼では、新婦が何らかの形で火とのかかわりを通して、浄火を踏んで新しく生まれ変わることを意味している（写真11）⁸。モンゴルと日本のこれらの習慣には、家の火の神に認められ受け入れられて、その保護下に入り、正式に家族の一員になるという意味合いを持っていると考えられる。

その次に、火は多産を象徴する。火は様々な活力の源泉であり、その一つが生命を与え、生殖をもたらす性的な活力である。モンゴルの結婚式では花嫁が火に脂肪と酒をくべ、火を盛んに燃やす。ここには多産と家族の繁栄という観念が存在している。日本のアイヌにも出産や赤児に火にかかわるという習慣は認められる。モンゴルと日本に限らず、世界の多くの民族には、火は女性に多産をもたらす力があるとの観念が様々な形で見られる。例えば、ローマの伝説では、処女が火の傍らに坐っている時に火の粉をあびて孕んだと伝えられている。

三、葬式に見られる火

葬式は人生の最後の通過儀礼である。モンゴルと日本の葬式には、火の機能及び象徴的な意味における重層的な特徴が見られ

る。およそ次のようにまとめられよう。

まず火は浄化として用いられる。火は生氣・活力に溢れる反面、破壊力もあり、災厄や不浄のものすべてを追ひ払う能力を有するため、清めにおける有効で不可欠な方法である。東内モンゴルつまり農耕の進んだ地域では、埋葬から帰宅の際、住居の外で二つの火の間を通るかまたは火を跨いで不浄を祓い清める。参考までに言うと、狩りのとき、獲物が獲られないまたは少ないことは、猟具が穢れているからであると考えられる。その場合も火を起こし、猟具を火の上を通して清める⁹⁾。日本の長野県諏訪地方では埋葬後火を焚き、九州の阿蘇地方では「ハツの手」という八カ所をくびった松明に火を点じ、墓の周りを左まわりに三度引き回す習わしがあるが¹⁰⁾、これらにも浄化の要素が含まれているのであろう。これらの儀礼は死霊や悪霊に対する呪術であり、火の破壊力は象徴的・霊的なものであって、決して火の物的特性としてのものではない。

次は火の媒介的機能である。農耕が進んだ東部内モンゴル地域では、埋葬後、埋葬地で供物を焼いて死者を祭る習俗がある(写真12-16)。ここでは、火の仲介で供物を死者に渡しているのである。火は人間と冥界、生者と死者とを結ぶ媒介の役割を果たしている。死者と関わる際における火のこの機能は日本の盂蘭盆にも看取される。すなわち盆における迎え火と送り火であり、火は行き来する祖霊の媒介となる。

最後には火は隔離や別れを意味する。上で述べたように、モンゴル人は埋葬から帰宅前に清めるが、大晦日にも火で清める。また、大晦日の夕方、住居から少し離れた

場所で祖先に供物を焼き供えた後、埋葬の場合と同じように、帰宅前、住居の外で火を用いて浄化する。この作法には清めのほかに、火を以って死者の到来を防ぐ意味が含まれている。類似の習俗は日本にも見られる。出棺の際に、門火を焚く慣わしは死霊が二度と家に帰ってこないために行なうものと解釈されている。野辺送りの行事として、多くの地方では、火を先にして葬列が行くのである¹¹⁾。ここでは、火は人間と死者とを隔離する方法と境目になっている。これと上述した浄化の機能とはともに火の強大な破壊力に基づいたものである。

四、イニシエーションにおける火

火がいとなむ重要な機能は、媒介者としての機能である。火によって人や物はその性質を変える。

モンゴルの土着信仰たるシャーマニズムには、火および火に関連する煙が重要な役割を果たしている。ここでは、シャーマンの入巫儀礼における火を考察してみる。

東部内モンゴルでは、正式なシャーマンになるには老シャーマンにつき、長期にわたり厳しい訓練を受けた後、入巫儀礼の試練である「九つの関門」を乗り越えなければならない。この「九つの関門」は地方によって具体的な内容が多少異なる。一説には、錐関(yisün tebene jegüü-yin dabaga)、火熨関(yisün ilür-ün dabaga)、犁関(yisün qušigu-yin dabaga)、九つの火関(yisün obuga val-un dabaga)、銅銭関(yisün gaulin jogos-un dabaga)、縄関(yisün chalman degesü-yin dabaga)、秣切り関(yisün jaduuyin dabaga)、槍関(jida-yin dabaga)、刀関

(yisün š irgugul-un dabaga) であり、なかの火熨閼、犁閼、銅錢閼と九つの火閼の四つはみな火の試練である。また、「九つの閼門」とは裸足で真っ赤に焼いた九つの稊切りを踏み通すことであるという地方もあるが、真っ赤に焼いた稊切りを裸足で跳び下りを九九八十一回繰り返すともいう。試練を通した人は正式なシャーマンとして認められる。

試練の基準が若干食い違っているが、いずれにしても、火がシャーマンの入巫儀礼における必要不可欠の重要条件となっている。特に後者の二つにおいてはさらに明確である。これは火が超自然の神聖性と巫的能力を有し、俗から聖に変わる主要なしるしと試練方法であると考えられているからである。火に焼かれることによって試練の完結を成すことができ、神化を遂げる。

しかし、火とシャーマンの巫的能力とは如何なるかわりを持つのか？ エリアーデ (M.Eliade) は総合して言えばシャーマニズム文化圏には、次の象徴的関連が言えると指摘した。シャーマンは肉体的に普通の人々が火に耐えられる限度をはるかに上回る体質を持ち、身的にも巫的（精神的）にも神霊と同じ次元に達している。なぜなら、エクスタシーに陥る状態で天上界と地下界を飛翔するシャーマンの特有な能力は、神秘的な内的熱を得たからである。シャーマンは火を操り支配することによって神秘的な内的熱を獲得・蓄積し、荒々しい破壊力である火の本性を活力として内的な巫的能力に変化させる。火に耐えられる体はシャーマンの欠かせない必要条件である。シャーマンは火の本性を内的巫力に変えられる人であ

る¹²。東内モンゴルでは、入巫儀礼のみならず、シャーマンの治療法においても火は重要な機能を発揮しており、シャーマンは治療に常に火を用いる。

火によってより以上の存在に造り変えられ、または神性・霊性を得られるという觀念は日本にも存在する。『古事記』にヤマトタケルが東征するときに相武の野で敵に火を放たれ、その火の中で剣を振るって火を消し、敵を破ったという話がある。ヤマトタケルは火の試練を受けた後より強力になる。火に焼かれ鍛えられたことによって超人間的な性格と能力を得られ、土を陶器に、鉱石を金属に変えるように、人間もまた火によって人間以上の存在へ移行を遂げる。モンゴルシャーマンの入巫儀礼のように、ヤマトタケルの話しにも火を以ってイニシエーションが行なわれる。上記の出来事でヤマトタケルは新しい呼名を得ている。この点にはすでに入社儀礼的性格が認められる¹³。

五、終わりに

火は自然と文化の境界にあり、自然にも文化にも属する存在である。文化の視覚からいえば、火には家族の象徴、生活の連続と中断及び物の性質を変えるとといった重層的な機能と象徴的な意味が見られる。しかし火の持つ物的から象徴的機能のなかで非常に重要な一つはその媒介者としての機能である。すなわち物と物、人と人が結びつけられ、或いは離され、或いは火によって人や物はその性質を変える。

異なる民族では自然地理環境や歴史文化はそれぞれ異なる。ゆえに、各民族の文化

習俗において火の表出はそれぞれ特徴を持つ。しかしながら、人類にとっての火の物的な機能および火の体験の神秘性は共通の根源的なものである。したがって、モンゴルと日本のように、民族の系統、文化の流れに相違があるにもかかわらず、火に関する習俗およびその文化象徴的意義には共通する特質が見出される。

* 本稿は内蒙古自治区社科規劃項目「現代蒙古族農耕文化研究（07E040）」の研究成果の一部である。

注

¹ モンゴル式住居であり、組み立てや解体が容易にできるようになっており、運搬にも便利である。

² *γ alindar* “monggol ger-ün jang üyile”、(モンゴルゲル風俗録105頁、113-114頁)、内蒙古人民出版社、1990年。

³ 前掲 *γ alindar* 著書 169-173頁。

⁴ 坪井洋文他 『日本民俗文化大系第十巻 家と女性』、1985年、小学館、19-24頁。

⁵ Sa.Narasun 編 “Ordus-un jang a *γ* ali”、内蒙古人民出版社、1989年、257頁。

⁶ 大林太良編 『日本古代文化の探究 火』、社会思想社、1974年、50頁。

⁷ 坪井洋文他 『日本民俗文化大系第十巻 家と女性』、1985年、小学館、379頁。

⁸ 坪井洋文他 『日本民俗文化大系第八巻 村と村人』、1984年、小学館、387-389頁。

⁹ Sa.Narasun 編 “Ordus-un jang a *γ* ali” 内蒙古人民出版社、1989年、614-615頁。

¹⁰ 堀一郎『堀一郎著作集第六巻 生と死』、未来社、1990年、245頁。

¹¹ 同上堀一郎文献、241頁。

¹² ミルチャ・エリアーデ著 堀一郎訳『シャーマニズム—古代的エクスタシー技術—』(M.Eliade: Shamanism—Archaic Techniques of Ecstasy, New York, 1964)、冬樹社、1974年、605-608頁参照。

¹³ 前掲大林太良編、307-310頁参照。

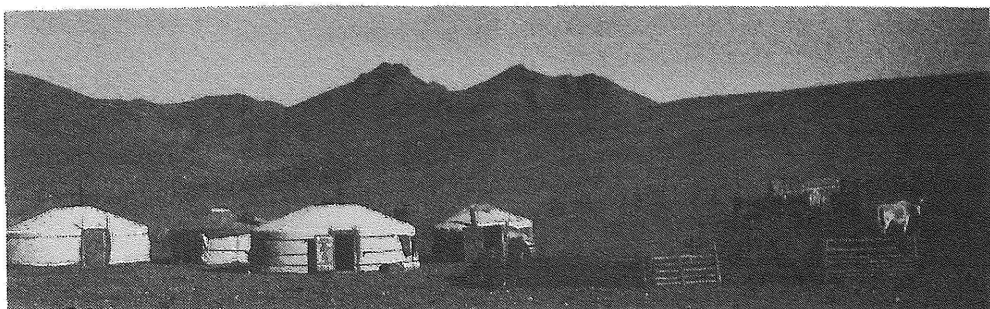


写真1 野原に点在するゲル。すぐ近くに家畜の囲いがある。

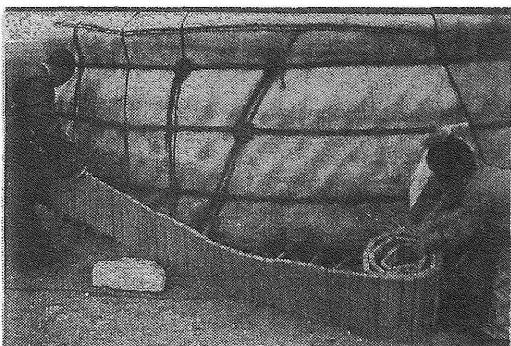


写真2 ゲルの組み立ての仕上げ。



写真3 ゲルのバガナ（左右2本の柱）と
トールノ（上部の二重円形）。



写真4 ゲルの真ん中には伝統的なモンゴルの炉（トルガ）が据えられ、2本の柱（バガナ）がある。炉の奥には仏壇が置かれ、その手前は年長者や客人が坐る上座、左（西側）は男性座になり、右（東側）は女性座。

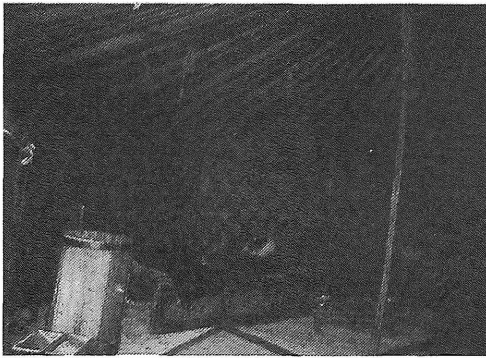


写真5 男性に関わる品物がゲルの左（西側）に置かれる。

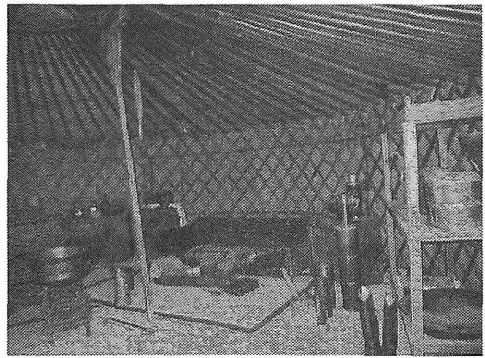


写真6 女性に関わる品物がゲルの右（東側）に置かれる。

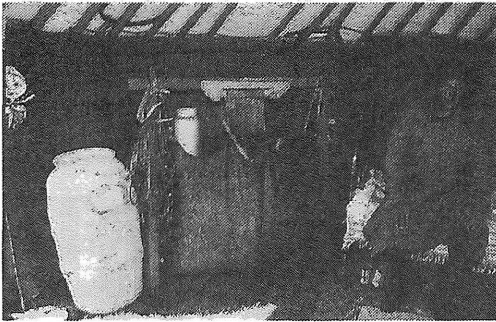


写真7 入って左が男の座、右が女の座。



写真8 囲炉裏のある生活：自給自足の生活においては、夕食後、家族で夜なべ仕事をする。囲炉裏のそばで、姑（主婦）がカカザにすわり火を守るなか、その周りでは父親が縄をない、姉娘は自在鉤の鍋で煮物の世話をしている。また母親（嫁）は焚き物の番をするキジリに座り、針仕事をしている（『日本民俗文化大系第十巻 家と女性』、1985年、小学館による）。



写真9 囲炉裏ばたの姑と嫁：写真は岐阜県吉城郡にて 1955 年ころ撮影されたのものである（『日本民俗文化大系第十巻 家と女性』、1985 年、小学館による）。

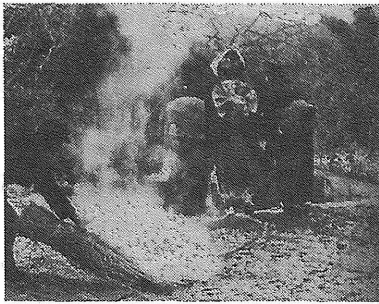


写真10 送り火：「門火」とも称され、近畿地方では嫁が生家を出立するときに行われる場合が多く、葬礼の火に擬せられる傾向があり、二度と生家に帰らぬという意味がこめられていたという。これは奈良県の送り火の情景である（『日本民俗文化大系第八巻 村と村人』、1984年、小学館による）。

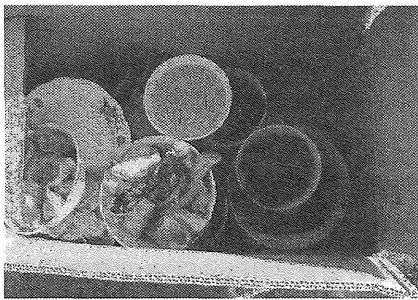


写真12 段ボールに入れた供物に餃子、ゆでた肉、牛乳で和えたモンゴル黍、白ご飯、おかず、魚、漬け物が見られる。



写真14 木の枝を集めて薪にする。手前は紙銭、左は供物が入った段ボールとビニール袋である。

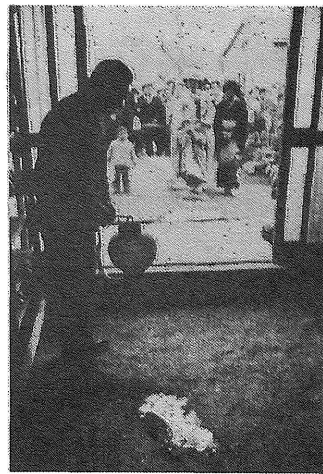


写真11 火を跨ぐ入家儀礼：嫁が婚家に入る際に火を跨いだり、松明の間を潜ったりする儀礼習俗がある。このような屋内での事例は稀であるが、福島県の習俗である（『日本民俗文化大系第八巻 村と村人』、1984年、小学館による）。



写真13 供物の酒、線香。ビニール袋の左手前に盃も見られる。

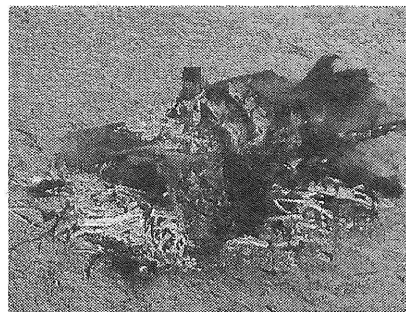


写真15 火を熾してからまず紙銭から始め、食品、酒、タバコなどを供える。



写真16 燃やされる紙銭、調理した魚、春雨、鶏肉と茶の葉、ビスケットなどが見える。